環境教育人を訪ねて 第7回

浜本 麦（ばく）さん

NPO法人くすの木自然館代表理事

誰でもどんな人でも、自然体験ができる仕組みを作る

文：垂水恵美子（JEEF）

鹿児島県姶良（あいら）市、霧島錦江湾国立公園の重富海岸を拠点とするNPO法人くすの木自然館・代表理事の浜本麦（ばく）さんの信念は『人と生き物が無理なく共生できる持続可能な世の中を作る』。楽しくなければ行動変容に繋がらないし、生活水準を下げろというのも無理な話だ。バランスのとれた社会を考える必要がある。難しいことを理屈から入るのではなく、体験を通して伝えていきたい。出前授業やエコツアー、なぎさミュージアムの運営や観察会に加えて、近年力を入れて取り組んでいるのが『自然体験のユニバーサル化』だ。年齢、性別、障がい、関係なくどんな人でも自然体験ができる仕組みを作れないか。くすの木自然館のプログラムも改良に取り組んだ。自身の特性や状況によってみんなができる体験をできない人たちが、ここだったらできると喜んで帰っていく。きっとこの人たちは、この海岸の思い出を大切にしてくれるだろう。今、重富海岸は日本で唯一のユニバーサルビーチがある国立公園だ。

ツアー時の解説の様子

浜本さんは環境教育実践者であると同時に、学生時代からゴカイを研究する生態学者であることを大事にしている。

「人間が魚や野菜を食べるということは、目に見えない小さな生き物がその背景にいっぱいいるんだぞって、もっとちゃんと伝えなければと環境教育の分野に入りました」と話す浜本さんは、自分で研究し、論文を読み、ツアーで伝えることで、興味を持ってくれる人を増やしている。その甲斐あって、浜本さんのようになりたいと話す小学生もいる。プログラムに参加後、毎朝登校前にウミガメが産卵する海岸でごみ拾いを始めた。海洋学者になって世界から海ごみをなくすことが目標だと中学受験にも挑戦したそうだ。しっかりした次世代も育っている。

浜本さんが目指すのは、国立公園を「ちょっと行ってみよう」とハードルなく行けるような場所にすることだ。「生き物に興味がある人や自然が好きな人たちだけではなく、より多くの人に気軽に訪れてほしいし、生き物のつながりをみんなが意識してくれる世の中になればいい」と語った。今晩の夕食は、ゴカイに感謝しながら魚を食べようと思う。

干潟のエコツアー